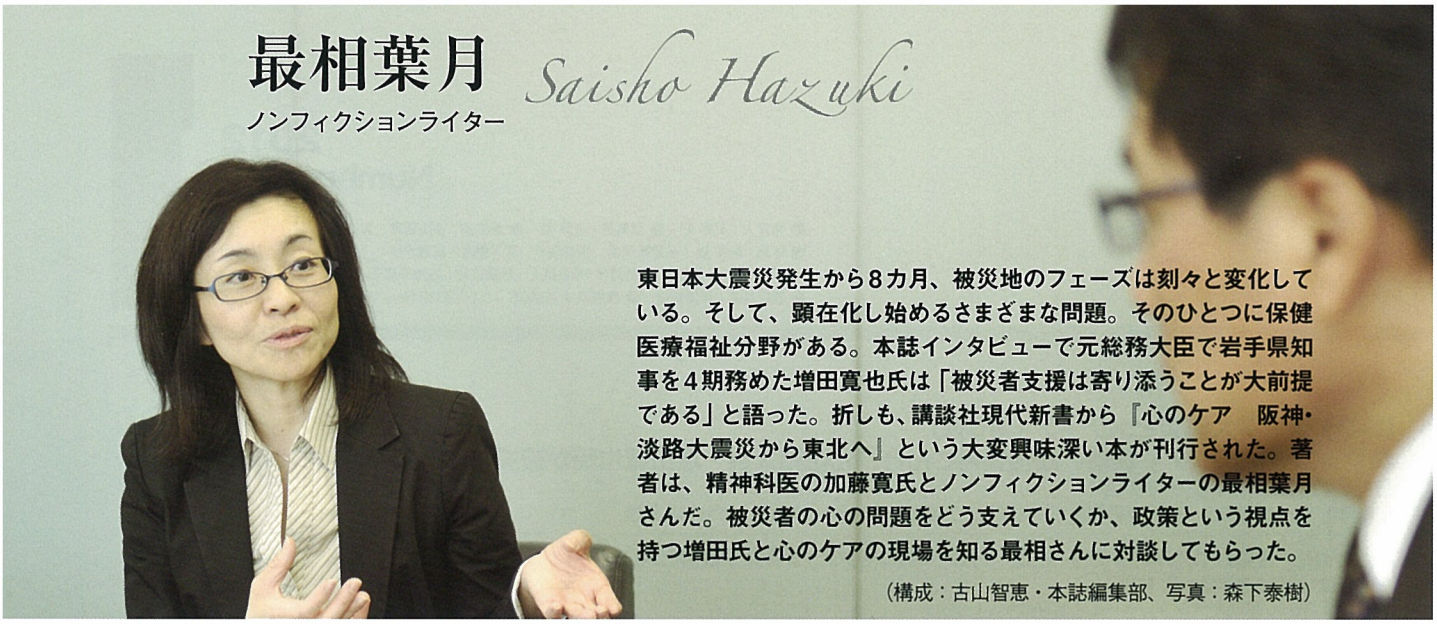

# 最相葉月 Saisho Hazuki

ノンフィクションライター

**東日本大震災発生から8カ月、被災地のフェーズは刻々と変化している。そして、顕在化し始めるさまざまな問題。そのひとつに保健医療福祉分野がある。本誌インタビューで元総務大臣で岩手県知事を4期務めた増田寛也氏は「被災者支援は寄り添うことが大前提である」と語った。折しも、講談社現代新書から『心のケア　阪神・淡路大震災から東北へ』という大変興味深い本が刊行された。著者は、精神科医の加藤寛氏とノンフィクションライターの最相葉月さんだ。被災者の心の問題をどう支えていくか、政策という視点を持つ増田氏と心のケアの現場を知る最相さんに対談してもらった。**

（構成：古山智恵・本誌編集部、写真：森下泰樹）

―特集―

# 東日本大震災とメディア 第8弾 特別対談

## 阪神・淡路大震災の経験を東北へつなぐ

**増田**　被災者支援は「寄り添う」という考え方で臨むことが大前提だと思っていますので、最相さんが書かれた『心のケア』は大変興味深いテーマです。頻繁に被災地に入っていますが、心のケアという視点で見ていませんでしたので、今日はいろいろと教えていただきたいと思っています。『心のケア』という本をお書きになったのはどんな理由からですか。

**最相**　東日本大震災（2011年3月11日発生）の時は東京にいて、3月15日に以前から予定していた取材のために神戸に向かいました。神戸空港で偶然、関西広域連合の取り組みとして兵庫県の心のケアチームがカウンターパートナーである宮城県に派遣されることになったことをネットで知り、その足で兵庫県のこころのケアセンターの診療所長である加藤寛先生をアポイントもないまま訪ねていきました。加藤先生は、3年ほど前から精神医療分野の取材でお世話になっている方で、今回の本のもう一人の著者でもあります。先生にお会いすると、今回の派遣の司令塔的役割を担われ、被害の大きかった沿岸部の仙台市宮城野区で活動するというので取材を申し込みました。その間に先生に定期的にお会いしながら阪神・淡路大震災（1995年1月17日発生）以後16年間の活動実態についてインタビューしたものをまとめたのが『心のケア』です。

先生は現在、宮城県のアドバイザーとして県の心のケアセンターづくりや、救援活動をしている消防士さんらの惨事ストレスの対応などを行っていらっしゃいます。

加藤先生から本書の提案があったのですが、自分ができることとしたら阪神・淡路大震災での経験を東北につなぐことではないかと考え引き受けることにしました。私は3歳から20代半ばまでを神戸で過ごし、阪神・淡路大震災では取材に入っています。

本書を書くにあたっては、医療の提供の仕方はフェーズとニーズによって変わるので、支援者はどういうことを踏まえながら被災地の方々に接したらいいか、失敗談も踏まえた実践的な内容を盛り込み、わかりやすくまとめることを心掛けました。

**増田**　心のケアに関するフェーズとは、具体的にどういうことですか。

**最相**　心のケアチームは、まず精神科医療をいかに継続して提供し続けるかを考えます。今回、沿岸部の精神科病院の多くが被災していますので、入院患者の転院の手配や薬の継続的な提供を行っています。その後、避難所を回って症状の出ている人たちの対応を行います。

**増田**　心のケアに関する問題というのは、地元の地域保健システムを担当する方が行うことが、住民にとっては抵抗感が少ないのでしょう。

**最相**　そこは外部の支援者たちも承知していて、活動のメインは地元の支援者の後方支援に徹しています。

**増田**　心のケアに継続して取り組んでいく困難さは想像を絶するものだと思